平成21年4月20日発行（年4回刊） 第5巻第3号通巻23号 ISSN1349-595X

アナログオーディオ＆Newスタイルマガジン

季刊・アナログ

analog

2009
SPRING
vol.23

記事はオールカラー！

アナログ関連
モニター大募集

総力特集

アクセサリーで楽しむ
高品位レコード再生術
厳選の50アイテム

特別インタビュー
「僕はアナログ人間！ 財津一郎さん」

好評連載
銘機を鳴らす
第9回「ACCUPHASE C-2810＋M-6000」

いまこそクラシックカメラを楽しもう
第19回「ドイツの中小メーカー⑦」

最新フォノイコライザー
試聴レポート②

リードワイヤー道楽

- 至福の銘品！ 音の五つ星物語
- ピットインインタビュー「坂田明さん〈前編〉」
- モルトウイスキーの蒸留所を訪ねる
- 「山崎」25周年記念ボトルが登場！
- 現役の骨董品20世紀ラヂオ
- 最新レコード全33タイトルレビュー

り、その間の技術や部品性能の向上を考慮し、さらに音質向上を図っての再デビューということだ。新しいV40SEは同社の外部強化電源ブラックボックスの使用が可能になり、バイアス調整もより簡単で精密な調整を可能にすると同時に、V80と同方式の保護回路を搭載し、電源部の容量も高めているという。ここで、彼の作品は出力段に5極管を使用しているので、その訳を訊いた。

「3極管やトライオード接続は高能率なホーン型システムには向いていますが、現代的な低負荷スピーカーシステムでは駆動力や制動力、ダンピングファクターといった面で不満が出ます。また5極管は5極管として設計されているのですから、5極管接続で使うのが正当なのでは」

本誌試聴室に置かれたジュビリー・モノ。トールボーイのモニターオーディオGS60が小さく見える

というもっともな答え。これは十分に納得できると同時に同感できる部分だ。彼によれば、3極管接続と5極管接続を切り替え可能にするのは決して不可能ではないが、長期にわたって使用した場合に両接続方式ともに最高の状態で動作しているかどうか疑問が残るという。

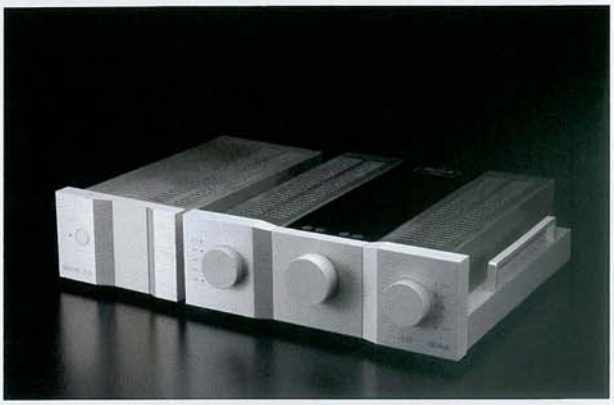
そこで、日本では切り替え可能な製品の人気が高いようだ、と言うと、

「やはり切り替え式にしましょうか?」

と笑いながら言ったが、彼のポリシーは変わらないだろう。

現代最高水準のペアであるジュビリーシリーズ

今回の主役ジュビリーシリーズの変遷について、彼は詳しく語ってくれた。



ジュビリー・モノに先立って日本に登場したジュビリー・プリアンプ(¥4,725,000)

「ジュビリーシリーズは約10年前から開発に取り掛かり、7年ほど前に生産を始めました。その間にも当然各部に改良を加え現在の形となったのは約2年前です。開発はオリジナルモデルのHP-500と同様、プリが先でした」

なぜプリアンプが先かを訊ねると、プリに関しては、早い時期から基本設計や基板パターンが彼の頭の中にでき上がっており、あとは素材の選択や細部の詰めで製品化できてしまうという。彼は15歳の時からプリアンプを作っていたので、プリから取り掛かるのが自然な流れなのだろう。また、音楽信号の流れもプレーヤー、プリアンプ、パワーアンプとなっている、と冗談混じりに語ってくれた。

そのジュビリー・プリが高い完成度と音質を実現できたので、ジュビリー・プリの性能をフルに発揮させられるようなパワーアンプは未経験であったため時間を要したらしい。

「パワーアンプは十分な出力を要求されるのはもちろんですが、駆動するスピーカーの負荷に関わらずプリアンプやスピーカーの特性を生かせるパワーアンプでなくてはなりません。そのため、大型で良質な電源トランスを2基ボトムパネルに搭載しています」

ジュビリー・プリの性能をフルに発揮させるためのパワーアンプというが、本機の巨大なサイズは最初から想定していたのだろうか? この質問に彼は一言「Yes」と言い切った。また一般的な水平配置のシャーシ構成を採らず、タワー状のシャーシ構成としたことも想定内という。この構成を採ることでトランスの振動源が増幅系に及ぶのを防ぐとともに、トランスの磁場の影響も防げるという。そのトランス類は磁気シールドを施したうえ、樹脂系アブソーバーを介して10mm厚のアルミニウム製ボトムパネルに取り付け、振動を効果的に減衰させるなど、古典的な真空管式アンプとは異なる現代的な設計手法を採っている。

このジュビリーシリーズは現代最高水準のペアであることは間違いないが、僕も含めて憧れだけに終わる人が多いのが現実だろう。しかし先のフォノモジュールやV40、V70のSEバージョンは現実味があり、見逃せない存在となるだろう。

本機の内部。カスタムメイドのトランスが下部に搭載されている

入力端子はRCAとXLRを装備。スピーカー出力端子は2系統用意されている

人 Human

デビュー以来一貫したポリシーを崩さないトランス類の製造会社を前身とするドイツの真空管アンプ専業メーカー

アンドレアス・ホフマン
Andreas Hofmann

ドイツ
OCTAVE AUDIO

フラッグシップモデルの登場で話題の管球アンプブランド

Text
小林 貢
Mitsugu Kobayashi

初のフォノイコライザーが年内に登場する予定

ドイツ、オクターブは1980年代半ばの創業時から、自社で開発・生産する良質な電源・出力トランスを搭載した堅実かつ高品質な製品を作り続けている。そんな同社の旗艦といえるジュビリー・プリアンプが昨秋、そしてパワーアンプのジュビリー・モノが本年初頭に、受注生産という形で日本市場へ正式投入された。それを機に来日中の、同社主宰者アンドレアス・ホフマン氏にインタビューする機会に恵まれた。

同社の前身は、ホフマン氏の父君が1968年に設立したコイルやトランス類の製造会社「ホフマン・トランスフォーマーズ」である。そして1980年代にホフマン氏が処女作を発表し、真空管アンプメーカーとしての道を歩みはじめたのである。その後、87年に同社の第一作であり今も改良を加え現役モデルとしてカタログを飾るHP500を完成させ、アンプメーカーとしての第一歩を踏み出したのである。

ジュビリー・モノの話を訊く前に、同社の近い将来の展開について質問した。彼は淡々とした口調で、

「まず今年中に導入しようと考えているのは、単体のフォノモジュールです。3系統のインプットを備えていますが、各入力はモジュール化されているのでMM、MCなどユーザーの好みに合わせた組み合わせが可能です。また購入後に追加することもできます」

同社として初めてのフォノモジュールということで日本のファンの注目を集めるのは間違いないが、ハイエンドのファンに愛用者が多いMC型の昇圧方法が気になるところ。同社の生い立ちを考えたら当然ステップアップトランスという答えが返ってくると思ったら、半導体を使ったヘッドアンプだという。しかし以前に昇圧トランスも設計したことがあるので、将来的にはトランスも追加したい考えはあるようだ。彼が作ったら、半導体ヘッドアンプに負けないワイドレンジを実現した製品となるのは間違いない。

プリメインアンプのSEバージョンも実現

そしてフォノモジュールとともに市場投入を考えているのは、比較的手頃な一体型アンプV40とベストセラーモデルV70の両機の、SEバージョンという。両機は本国では既に発表から6年ほど経過してお

アンドレアス・ホフマン氏

設計者の理想を徹底的に追求した ドイツブランドのフラッグシップモデル

Text by 小林 貢
Mitsugu Kobayashi
Photo by 田代法生

Profile

幅広い真空管アンプのラインアップを持つドイツのOCTAVE（オクターブ）。昨年、フラッグシップとなるプリアンプJubilee Preampが日本でも発売。今春、パワーアンプのフラッグシップ機となる「Jubilee Mono」が発売開始となる。Jubilee Monoは、5極管6550Cを8本用いた、最大出力250Wのパワーアンプ。ブランド創立の初期から、オリジナル技術による電源管理と電子保護回路を採用しているオクターブらしく、本機でも電源管理システムには、入念な検討が施されている。完全受注生産モデルで、フロントパネルのカラーリングなどの特注が可能となっている。

トランス類を下部に収めたタワー型パワーアンプ

近年、世界各国のブランドからリーズナブルな価格の真空管アンプが登場し、市場を賑わせ人気を高めている。それらと一線を画する高性能と高品位なサウンドを実現した高級機を送り出し高い評価を獲得しているのが、アンドレアス・ホフマン率いるドイツのオクターブだ。

昨年、同社のフラッグシップたる高性能プリアンプJubilee Preampが日本市場にも投入され話題となっている。そして今春は、そのJubilee Preampの性能をフルに発揮すべく設計・開発されたフラッグシップ・パワーアンプJubilee Monoが受注生産というかたちで日本上陸を果たした。実をいえば、この両機は何年か前のドイツのハイエンドショウですでに目にしていたが、日本への導入は遅れていた。その間にも改良が加えられ、デビュー時よりも確実にクオリティを高めているのは間違いない。試聴室に置かれた本機を目にすると、ドイツで目にした時よりも大きく感じられた。本機をセットできる部屋を持つ環境の人が羨ましく思えるのは僕だけではないだろう。

一般的な真空管式アンプのように平面配置でなく、タワー状シャーシを採用しているのが本機の特徴だ。重量があり、それ自体が振動源でもあるトランス類を下部に収め、マグネチックシールドを施してポリエチレン系樹脂のサスペンションを介し、10㎜厚のアルミニウム製ボトムプレートに取りつけることで、振動を減衰させている。その上段にドライブ段、出力段用の大容量キャパシターなどを配し、最上部に増幅段を配した3層構造を採っている。この構成により、真空管式増幅段にトランスの振動を伝えることなく、またトランスの磁場の影響も排除できるとしている。

出力段は5極管の6550C8本で構成、クアトロ（4×4）プッシュプル駆動することで250W（4Ω）というハイパワーを実現。強力な電源部でバックアップすることで低負荷スピーカーも正確に駆動することを可能にしている。また本機は同社初のステレオパワーアンプRE250からのオリジナル技術を受け継いでいる。そのひとつが電源管理システムだが、これはスイッチ投入後の真空管のヒーティングと供給電圧を監視し調整するという。これにより使用真空管のロングライフ化を可能にし、電源投入時に発生する大電流を扱う電源関連パーツの負担も軽減している。もう一つのオリジナル技術の電子保護システムの搭載は、もはや同社のアイデンティティとなった観がある。

両エンドがスムーズに伸び全帯域に渡り高い解像度を確保

本機は大型・重量級パワーアンプだが、パワーで押し切るような無骨さはなく、現代的に洗練された高音質を実現し、どんなスピーカーも正確に鳴らしきると思われる駆動力の高さを有している。音楽を自然体で再生するため、特にfレンジの広さを意識させることはないが、シビアに聴くと真空管アンプとは思えないほど両エンドがスムーズに伸び、全帯域に渡り高い解像度が確保されていることに気づく。

低域レスポンスも秀逸で、試聴室のレファレンススピーカーのグレードが数段高まったのではと思えるスケール感と圧倒的な情報量の高まりが見られた。そして低域再生限界も高まり、20～30Hz付近にチューニングされたキックドラムの質感も自然に再現し、アタック音は反応が良く、鈍重さや抑圧感を伴わず空気感まで鮮明に再現した。また『スマイル』のボーカルは鮮度が高く生き生きとした表情で再現され、エレクトリック・レディ・スタジオで録られたディオンヌ・ワーウィックのデモテープなどは38㎝・2trマスターらしい密度の高いサウンドが得られ、ボーカルをはじめバックの楽器群の音像も適度な厚みがあり実体感、臨場感が高まってくる。

簡単に手が出せる価格ではないが、投入された技術やパーツを考えたら決して法外な価格設定でなく、現在考え得る最高水準のパフォーマンスを実現したアンプとして高く評価できる製品だ。

輸入元から

ドイツOCTAVE社は、高性能のコイル、トランスの設計・開発、製造を専門とする会社を前身としています。現社長のアンドレアス・ホフマンは自分の完璧な音の理想にできる限り近づこうと、1980年代から真空管アンプの設計を続けてきました。プリアンプのJubilee Preとパワーアンプのの Jubilee Monoは、彼の理想を具現化したモデルです。
（有限会社フューレンコーディネート）

FIVE STARS

70kgの弩級パワーアンプ

OCTAVE
Jubilee Mono

モノラルパワーアンプ
¥7,980,000（ペア／受注生産）

Specifications

●出力：250W（4Ω）●出力段構成：クワトロ・プッシュプル、5極管方式●使用真空管：6550C×8、ECC802×4●再生周波数帯域：3Hz～120kHz／0～6dB出力幅●入力インピーダンス：RCA 90kΩ、XLR 13kΩ●入力感度（フル変調）：RCA 2.4V、XLR 2.4V×2●全高調波歪：1%以下（4Ω／1kHz／220W出力時）●SN比：106dB以上●最小負荷インピーダンス：2Ω●アイドル電流：通常動作電流 28mA 出力管毎●真空管ごとに調整可能なグリッド電圧調整範囲：－30～80V●突入電流を防ぐためのソフトスタート機能：最大800W／時間遅延3フェーズ、6Aを超えた電流の時間は1秒未満●電源ONからの起動時間：50秒●NFB値：17dB●ゲイン：23dB●オープンループゲイン：40dB●残留ノイズ：200μV以下／200Hz～20kHz内では100μV以下●消費電力：最小300W（無出力信号時）、最大600W（フルパワー時）●サイズ：280W×750H×420Dmm●質量：70kg●取り扱い：フューレンコーディネート